



ビーダーマイヤーの典型的な室内のインテリア



ビーダーマイヤーのコーヒーセット



ビーダーマイヤーの食卓
アウガルテンの磁器とロブマイヤーのグラス類

食卓の喜び

第11回

AUGENSCHMAUS UND TAFELFREUDEN(目のご馳走と食卓の喜び) より

著 者 Dr. Ingrid Haslinger

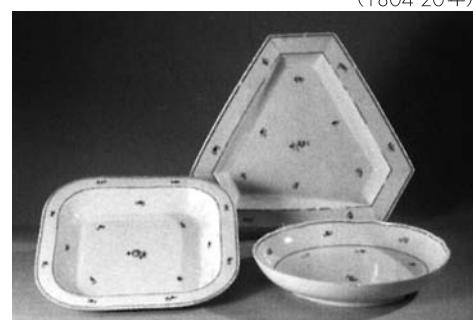
訳 山下満智子(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)、宇野佳子



● Ingrid Haslinger
(イングリッド・ハスリンガー)
ウィーンに生まれる。
ハプスブルク家宮廷の儀式や
テーブルマナー、銀器食器類
を研究。1987年『帝国のテー
ブル文化』、1998年『シーザー
の食卓』、2001年原著を執筆。

● 宇野佳子
筑波大学大学院修士
課程地域研究研究科
ヨーロッパ研究修了。
専門分野は言語文化。

ウィーン磁器工房の小花柄の食器セットの一部
(1804-20年)



ビーダーマイヤーの時代（1814-48年）

●「ビーダーマイヤー」と呼ばれる時代●

「ビーダーマイヤー※」と呼ばれる時代は、政治について考えるようになったブルジョワを大きく押し戻すことを意味した。フランス革命及びフランス国王夫妻の処刑で、ウィーンの宮廷は、完膚なきまでに打ちのめされた。王妃マリー=アントワネットは、皇帝ヨーゼフ二世やレオポルト二世の妹であり、フランツ皇帝の叔母であった。フランス革命に続く対仏戦争によって玉座から追い落とされた王室もあり、それは、かつて一度も体験したことのない大変革であった。ナポレオン一世が自らをフランスの皇帝に任じ、戦争の指揮に成功したことは、神聖ローマ帝国のみならずフランツ皇帝の玉座さえもおびやかしたのである。

対ナポレオン戦争の勝利や「ウィーン会議」（1814-15）におけるヨーロッパ勢力の再編後、強力な政治的反動が起こった。皇帝の側近で当時オーストリア随一の権力を誇っていたメッテルニヒ侯爵は、ブルジョワの政治活動や権力への反抗を阻止することに全力を傾けた。文書の検閲、厳しい警察の監視やスパイ行為によって、ブルジョワは「害のないこと」にのみ従事するよう強いられ、家庭に押し戻された。食べることや飲むことは、こうした「害のこと」のひとつであった。

● ビーダーマイヤーの食事 ●

オーストリアの歴史において、ビーダーマイヤーは、くつろぎや家庭を重視する時代として記憶される。人々は、音楽会や詩の朗読会、午後のお茶、郊外のワイン農家ホイリゲでの食事などを楽しんだ。ビーダーマイヤー時代の家庭の食堂は、快適な豊かさを誇り、すべてが気持ちの良い食事のために準備された。象嵌細工を施した木製テーブルは、食事時にはしばしば、多彩な色のテーブルクロスをかけて保護された。食器類は、アンピールかロココの様式でなければならず、そのモチーフには、小花を散りばめた文様から原色のはっきりした幾何学的模様まで、いろいろなものがあった。

貴族の家庭では、料理を一度に出すフランス式給仕法がいまだ支配的ではあるものの、料理を一品ずつ出すロシア式給仕法



ヴィーン磁器のコーヒーポットとカップ

も徐々に定着し始めていた。その一方で、市民の家庭のメニューはずっと控えめであった。主要な食事は原則として、スープやあばら肉、胸腺、タン、ソーセージ、腎臓、ゆで肉、カイザーフライシュ（豚バラ肉のベーコン）などと野菜を煮た「サッテル」、ペーストにした肉類、ローストした肉、そして粉を使ったメールシュパイゼであった。スープの具は、ヌードルやクネーデル、ノックル、精白大麦、ラビオリ状のシュリッククラプフェルなど多彩であった。

ビーダーマイヤーのテーブルには、こうした伝統的なスープの他に、カイザーシュニッツェル、牛の内臓のシチュー、焼レバー、ローストチキン、焙った家禽の肉、グラーシュ、グリルやローストした魚、燻製肉、クラウト・ウント・クネーデル、サラダ（ジャガイモ、セロリ、レタス、キュウリ、カリフラワー、豆、クラウトなど）やタルト、ケーキ、小さいパン菓子といった、今日もなおウィーン料理として挙げられる多くのものが見られた。

ウィーンのある旅籠屋の娘は、1830年ごろの食事について以下のように述べている。「…そのころ、コーヒーはまだほとんど知られていない、朝食はスープだった。領主様方のところは、チョコレートやワインのスープが普通だった。ブルジョワの家の食事は、どこも同じだった。ほとんど毎日スープで始まり、いつも同じだった。日曜日と木曜日だけは違っていたけれど、その他の日はスープと肉と野菜で、水曜日ならば、ブルジョワ家庭のどこに行っても、夕食は団子と燻製肉だった。」

ブルジョワ家庭の食事は、形式には全くとらわれなかった。当時の文献によると、堅苦しいセレモニーや古い礼儀作法などは追い払われて朗らかなおしゃべりを邪魔していた昔のあの仰々しい社交辞令やお愛想もまたなくなっていた。当時のブルジョワの生き方でいちばん大事なことは、すべての押し付けを憎むことだった。しかしあらゆる面で自由になったとはいえ、まだきちんと礼儀正しく振舞うことができない子どもたちは、形式にとらわれないビーダーマイヤーの食卓においてさえも、食事の場から締め出されていた。子どもたちは、大人になるまでは、台所や離れた別の部屋で「餌を与えられた」のであった。

● ビーダーマイヤー時代の料理本 ●

ビーダーマイヤー時代の料理本の著者たちは、清潔さ、そして料理がおいしそうに見えることを特に重視した。料理の構成を提案する際には、季節を考慮しなければならず、どの本もそのようにしていた。視覚的に洗練された食事が関心の的であった。「皿に付け合せを添えるのは、おいしそうにみせて食欲をより増進させるためである。そうすることで、絵のどこにも空白を残さない、すべてが目の保養になるような絵を描く画家と同じことをするのである。そのため、我々は、パセリ、ゼンメルの粉、アサツキを皿や料理にふりかけるのであり、そうすることで食事はますます美しい外観となるのである。」

訳注 ※ドイツ・オーストリアでの芸術様式のひとつ。簡素で実用主義的な様式。

1850年代に発表された小説中の誠実であるが事なかれ主義で俗物的な小市民、ゴットリープ・ビーダーマイヤーから後に名付けられた。